

高等教育研究センター

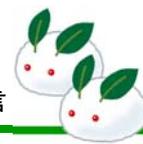
Research Center for Higher Education

Newsletter

No.029

2016.2

- 普通の授業で小さな『成長』をねらう
- お知らせ
- 活動報告
- スタッフから一言



信州大学 | 高等教育研究センター
SHINSHU UNIVERSITY

普通の授業で小さな『成長』をねらう

大学人の喜びって？



研究者の喜びとは何でしょうか。知りたかったことが分かる、誰も見つけていなかったことを見つける、誰も説明できなかった現象を説明する、といったところでしょうか。いろいろあり得るかとは思いますが、「私にとって研究者の喜びとはこれだ」と、比較的容易に言えるのではないのでしょうか。また、結果が出ているか出ていないかも、比較的容易に言えるのではないのでしょうか。

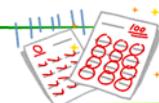
一方、大学教員にとってもう一つの仕事である教育についてはどうでしょう。教育者の喜びとは何でしょうか。こちらの方は、指導者と弟子という個人的なつながりの中で、たとえば「配属された時には西も東も分からなかったこの子が、小さいながらもそれなりの成果を出して卒論を書くまでになっている」といったような『成長』を確認できた時、というようなものでしたら、私たち大学人の肌で実感できるところでしょう。これこそ教育の醍醐味というものでしょう。



実はもったいない

それでは、一般の授業ではどうでしょうか。大学人が教育面で最も時間を費やすのは授業でしょう。そういう授業で、もし実感できる喜びがないとしたら、それはとてももったいないことなのではないのでしょうか。もったいない、と言うよりは、意識されてこなかった、と言うべきかもしれません。上のように、私たち大学人は、「学生を持つ」という状況では『成長』を普通に意識しますが、「授業をする」という状況では、『成長』ということ意識しない方が普通でしょう。それはどうしてでしょうか。ひとつには、「教育には時間がかかる」という事実があげられましょう。「学生を持つ」という状況では一人の学生を数年見続けます。一方、一つの授業は1 Semester 4か月しかありません。しかも対象は「学生を持つ」よりもはるかに多いのが普通です。こういう状況では、『成長』ということ意識しない方がむしろ自然でしょう。しかし、改めて考えてみると、勤務時間中、教育面で最大の時間占有率を持つ「授業」で『学生の成長を目撃する』という教育の醍醐味を味わえないとしたら、それはやはりもったいないことです。

採点基準というもの



ところで、「成績評価の厳格化」が求められ始めてもう随分になります。この「厳格化」は、「点を厳しくつける」という意味ではなく、「採点基準に厳格に従って点をつける」というものであると理解されています。ということは、採点基準がはっきりしていなければ、成績評価の厳格化は論理的に不可能である、ということになります。

採点基準に厳格に従って点をつける、ということは、点をつけられる受講生の立場から見ると、授業における自分の学習成果を採点基準が求めるところから積み上げていく、ということになりますが、もし採点基準がはっきりしていないとすれば、受講生はどこに向かってどのような努力をすればいいのかが分かりません。このように、採点基準がはっきりしている、ということは、受講生の都合から言っても強く求められるところということになります。

授業でも『成長』



反対に、もし採点基準がはっきりしていたら、受講生はどこに向かって努力すればいいのかが分かります。『シラバス・ガイドライン』で、授業の目標を「〇〇ができるようになる」という形にすることを推奨していますが、そのねらいは、授業の目標と採点基準を同じ形に一本化することで、受講生がどこに向かって努力をすればいいのかをより分かりやすくする、というものでした。「〇〇ができるようになる」は、授業目標であり同時に採点基準でもあります。受講生は「〇〇ができるようになる」ために努力をし、教員は「〇〇ができるようになったかどうかで成績をつけます。受講生にとっては、「可」以上の成績をもらったということは、努力目標であった「〇〇ができるようになる」がクリアできていることについて担当教員の保証をもらったことになります。

平成28年度から『授業改善アンケート』が『授業アンケート』となり、その中には次の質問項目が入ります。

「この授業が掲げた目標に、あなたは到達しましたか」
「あなたは、この授業の一連の経験を通して、達成感を
得ましたか」

これは、「あなたは自分の努力によって一山越えたと言えますか」、「そこに達成感を感じていますか」、という二つのことを聞いています。この二つに肯定的に答えるとい

うことは、受講生は、
「適切な努力によって自分はその課題をクリアでき、それによって達成感を得ることができた」
 と言えるということになります。それは小さな成功であり、教員によってそれが成功であることを保証してもらうことで、小さな自信となりましょう。その自信は「自己効力感」として自分の中に定着します。このプロセスは、小さいものではあっても、『成長』に他なりません。このように、卒論指導のような長期に渡る個人指導でなくても、一つの授業で『成長』を目撃することは、十分現実的な行動目標と言えるのではないのでしょうか。
 全部の授業でこのような筋書きが可能であるわけではな

いかもかもしれません。しかし、多くの授業でこのような『成長』をねらっているのではないのでしょうか。これを積み重ねていけば、信州大学は途方もなく強い教育力を持った大学になります。また、こういう小さな『成長』をいくつも経験できた学生は、自己効力感を持った社会人として活躍していただけるでしょう。ある政策課題がある時、「文科省が求めているから」「委員会で決まったので」という理由では、現場がやる気になるはずがありません。しかし、「そういうねらいがあるなら、それはやっただ方が自分の得になるし、何より受講生の得になる」という理解が浸透すれば、その政策課題は間違いなく推進されるでしょう。当高等教育研究センターはその浸透を本気でねらっています。

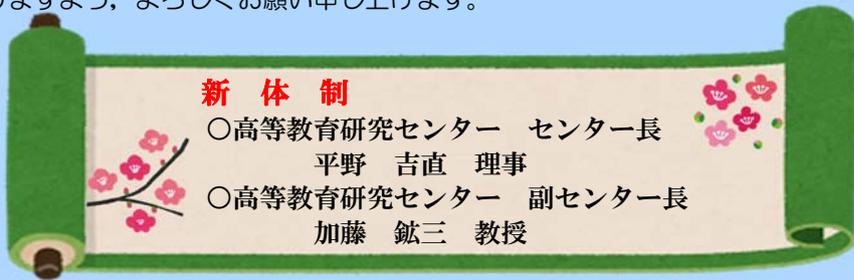
(文責：加藤鉦三)

お知らせ



10月から高等教育研究センターの体制が新たになりました。

10月から、高等教育研究センターのセンター長並びに副センター長が交代することとなりました。新体制のもと、ますますの発展に努めて参りますので、今後ともご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



新体制
 ○高等教育研究センター センター長
 平野 吉直 理事
 ○高等教育研究センター 副センター長
 加藤 鉦三 教授



平野 吉直 高等教育研究センター長

活動報告

2015年度シリーズFD「反転授業」を実施しました。



FDの様子（講師の向後先生）

11月10日（火）、平成27年度FDシリーズの一環として、「『反転授業』に関するFD」が開催され、早稲田大学人間科学学術院 向後千春教授を講師にお迎えしました。今回のFDでは、大人数でのグループワークの設計方法やテキストの制作方法等、様々な教育のテクニックを御紹介いただきました。信州大学松本キャンパス SUNS大会議室を主会場とし、各キャンパス・高等教育コンソーシアム信州加盟大学にも遠隔配信を行って、計69名の教職員が参加しました。開催後のアンケートでは、「日頃のグループワークのやり方について、今後の参考となる方法があり、大変勉強になった」などの意見が寄せられ、大変有意義なFDとなりました。

なお、同シリーズFDは現在オンラインにて受講が可能です。詳細は、下記のアドレスにアクセスしてご覧ください。

★<http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/approach/fd/2015/12/16493.php>

★★ご来場いただきました皆様、ご参加ありがとうございました★★

スタッフからひとこと



平成27年4月に富山大学から転勤して参りました学務課長大野です。早10ヶ月が過ぎます。国立大学全体では約50の大学において、本学と同様に高等教育研究センター（名称はいろいろあります。）が設置されています。学務課には2室、2グループがあります。教務グループが本センターの事務を担当していますので、何でもご相談ください。

さて、冬の信州は富山より寒いと聞いていましたが、既にそのことを感じています。これからの時期、何かと忙しくなりますので、皆様におかれましては健康に注意しつつ業務に従事されますように。

（学務部学務課長 大野昭彦）

